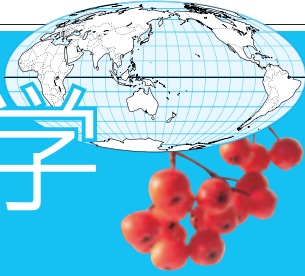


学報

学校法人 北海学園
北海道大学
アジアの時代に、アジアを学ぶ。
Hokkai School of Commerce Newsletter



Vol.19
2015.12.21
発行:北海道大学
編集:北海道大学広報委員会
〒062-8607
札幌市豊平区豊平6条6丁目10番
TEL:011-841-1161(代)
FAX:011-824-0801
http://www.hokkai.ac.jp
制作:(株)ラボット

主な記事

4.	オープンキャンパス	2面
5.	山梨大学威海分校から短期研修派遣受入	2面
6.	交換留学生が出発	2面
7.	モンゴル文化教育大と交流協定締結	2面
8.	キャリアガイダンスと就職支援	3面
9.	教職課程が取り組む官学連携	3面
10.	後期ガイダンス学生向け研究倫理教育の実施	3面
11.	2年次所属学科決定	3面
12.	履修登録にGPAを導入	3面
13.	地域における観光と医療に関する北海道・台湾コンファレンス開催	4面
14.	外国語スピーチコンテスト結果報告	4面
15.	開発政策研究所セミナー	5面
16.	北海学園札幌高校と高大連携協定調印	5面
17.	フィールドワーク 竹野ゼミ	5面
18.	留学だより	5面
19.	商学科合同特別講義開催	6面
20.	観光産業学科合同特別講義開催	6面
21.	「研究のいま」横田榮一教授	6面
22.	ゼミ訪問 李ゼミ	6面
23.	軟式野球部が2部リーグ昇格	7面
24.	第一回教養講座開催	7面
25.	Photo Gallery [北海商科祭]	7面
26.	OB・OG NOW!	7面
27.	2015年度 後期公開講座開催	8面
28.	浅羽祭挙行	8面
29.	医務室から「二十代の健康」連載⑨	8面
30.	交換教員紹介、大学院生紹介	8面
31.	新刊紹介	8面
32.	高校生懸賞作文の募集と表彰式	8面
33.	行事予定	8面

第10回北海商科祭開催。
テーマ Turning Point ～受け継がれし想い～



入学試験
2016
入試が変わる！

一般入試

★3科目入試
国・英・選択

2/8月

★2科目入試
国・英

2/13土

センター試験利用入試

★Ⅰ期入試
高得点の上位3科目利用

1/16土～1/17日

★Ⅱ期入試
高得点の上位2科目利用

1/16土～1/17日

http://www.hokkai.ac.jp/nyugaku/

進む校舎
2号館建設

現在、新校舎（2号館）の建設が着々と進んでいますが、どのような建物となるか、少しばかり紹介します。5階建て延床面積3,200㎡となる2号館は、学生定員増に対応した新しい時代感覚と環境を取り入れた建物です。外観はシンプルな印象ですが、西側外壁を総ガラス張りにして、解放感あふれるエレベーターが設置されます。1階部分はサークル室や自治活動室など、学生中心のフリースペースを大きく確保し、やや手狭となったキャンパス内でも創造的な就学活動が出来る十分な空間を用意しました。また、北海学園初となる女子学生専用

空間（パウダールーム）が導入され、癒しや憩いの場としての利用が予想されています。1号館との連絡通路で結ばれた2階部分は、おもにコンピュータ実習室が設置され、3・4階部分には中・小教室が配置され、教室環境の拡充強化が図られています。5階は多様な空間施設として、現在構想中です。また近年問題となっている夏の異常な暑さ対策として、教室にエアコンが導入されました。学生の就学意欲向上に貢献することが期待されます。完成は来年春（平成28年4月）を予定しています。（渡辺）



建設工事中新校舎2号館



新校舎2号館の完成予想図

北海商科祭報告記

去る9月26日、穏やかな天気のもとで第10回北海商科祭が開催されました。今商科祭は、例年会場としていた場所が新校舎の建設により使用できず、限られたスペースでのコンパクトな開催となりましたが、メインステージを平岸街道側正面玄関前に設置したことで道行く人々の注目を集めることとなりました。そのステージでは、まずダンスサークル「\$ Dip」のパフォーマンスに始まり、人気企画「コーラの早飲み決定戦」も行われ、アーティストLIVEではご当地アイドル「HAPPY少女」のパワフルなステージで盛り上がりました。一方、校舎内2Fでは北海商科祭の写真展が開催されて過去の全商科祭を回顧することができ、3Fの縁日会場では射的などが楽しめ、人気アニメ作品もマラソ

ン上映されました。そして夕刻迫る頃、待望のお笑いLIVEでは、“君のハートに、レボ☆リユーション!!”の決め台詞でおなじみの「宇宙海賊ゴー☆ジャス」の登場となりました。華やかな衣装を身にまとったゴー☆ジャスが登場すると、会場に響めきが起きました。定番のショートコント3連発に続き、“色紙プレゼントジャンケン大会”で大いに盛り上がりました。エンディングはゴー☆ジャスと実行委員のコラボ司会による恒例のお楽しみ“商科大抽選会”が行われ、豪華景品の当選者が次々と発表されて会場の熱気はピークに達しました。最後に実行委員長の内田君の終了挨拶で、2015年の北海商科祭はフィナーレを迎えました。とりまとめ役で協賛企業の開拓・交渉にも走り回ったサークル連合・実行委員の諸君は、精一杯頑張ってくれました。本当にご苦勞様でした。（佐藤）



第10回北海商科祭を振り返って

今年で北海商科祭は10回目を迎え、歴代の先輩方から継がれてきた「伝統」や「想い」のもと、予想外のアクシデントやトラブルが続き一進一退を繰り返しながらも、新校舎建設のため限られたスペースで「Turning Point—受け継がれし想い—」をテーマとし開催準備をしました。当日は、昨年からスタートした校舎内での「ミニシアター」、例年は屋外で開催していた縁日（ヨーヨー釣り、ストラックアウトなど）、屋外のステージでは「コーラの早飲み決定戦」、アーティストLIVE、サークル模擬店などを企画し、来場された皆様の協力により無事フィナーレまでを迎えることができました。今回、委員長を経験し、多くの事を学ばせて頂きました。「仲間」というかけがえのない存在と共に商科祭の運営に携われたこと、準備期間中常にサポートをして頂いたサークル連合と前日、当日に手伝って頂いたサークルの皆様には心から感謝しています。これからの北海商科祭を担う後輩たちには、先輩たちの足跡を大切に「受け継がれた伝統」と「大学祭への想い」を忘れずに「仲間」を大切に盛況な大学祭を開催して欲しいです。



オープンキャンパス開催

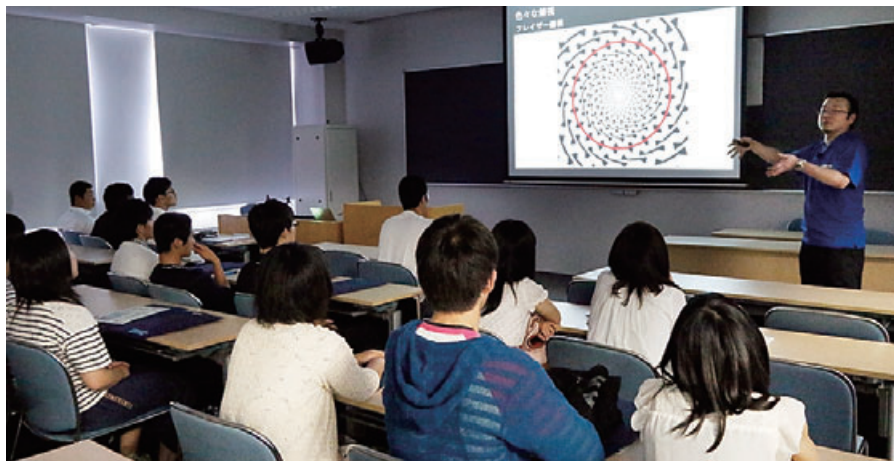
恒例のオープンキャンパスが今年も6月28日の日曜日と夏休み期間中の8月6・7日、さらに9月27日の日曜日、午前10時から午後4時まで、延べ4日間にわたり本学において開催されました。

オープンキャンパスの参加者を集めた全体説明会ではプロジェクターを駆使しながら、まず本学の学部・学科の概要について、商学教育の歴史と背景を加味した説明がなされ、その後に、本学の特色あるカリキュラム、便利な大学生活、見識を広げる海外留学、引き続き好調な就職状況など、それぞれの具体的な内容や、比較される特色について、ていねいな説明がおこなわれました。

また、中国語・韓国語・英語の外国語会話に関して体験学習の参加機会が設けられ、さらに知的好奇心を刺激する模擬講義の聴講や、学生によるゼミナール研究の公開報告会の様子も、一部ですが見学できました。こうして来学者は本学での学びの一端を、より具体的に体験する機会を得ることとなりました。参加者を対象とするアンケートによれば、いずれの企画も大変好評でした。

さらに、在学生の協力を得ておこなわれた先輩によるアドバイス付き「キャンパスツアー」や、担当者が来学者一人ひとりの具体的な質問に懇切丁寧に答える個別相談コーナーでは、多くの参加者や来訪者があり耳を傾けていました。

なお、今年度設立10周年となる北海商科大学は、大学を巡る社会や受験生の要請に応え



るべく今年度実施の入試から、一般入試はこれまでの3科目入試(2月8日入試・300点満点)に加え国語・英語の2科目入試(2月13日入試・300点満点)を新たに導入し、センター試験利用入試も従来の3科目試験(Ⅰ期入試)に加え、高得点の上位2科目を利用したⅡ期入試が始まります(詳細は「大学案内」・「入学試験要項」を参照ください)。次の10年も引き続き内容の充実に鋭意努めてまいりますので、ご期待ください。(村松)



写真上：第二回オープンキャンパスでの模擬講義、下：教員による個別相談

山東大学威海分校からの短期研修派遣受け入れ

去る7月10日、本学の交流協定校である山東大学威海分校から引率教員1名(張体勇先生)と研修生14名(男子2名、女子12名)が千歳空港に到着し、当日、すぐに北見校地に向かいました。11日から14日までの4日は北見校地にて日本語研修を受け、15日に札幌に移動。16日から29日までは本校8階の開発政策研究所で日本語研修を受けたほか、校外研修(札幌時計台、道庁赤レンガ、札幌駅、北海道大学構内などの見学)、校外研修(富良野・美瑛付近、自由参加)などを行いました。29日の午後には森本理事長宅で修了式が行われ、研修生一人一人に森本理事長手ずから修了証書が手渡され、夕食会が行われました。研修生一行は翌30日に札幌を離れ無事帰国しました。(水野)



日本語研修



写真左下：日本語研修後の本学学生との交流会、上・下右：7月29日修了式の記念写真と研修生挨拶

交換留学生が出発

去る8月27日、韓国の大田大学校の短期留学プログラムに参加する学生10名(女子10名)が千歳空港から出発しました。参加学生は5月に行われた留学生選抜試験に合格した学生です。本学の提携校である大田大学校において、約5ヶ月間にわたり、語学プログラムを中心に韓国文化や生活風習についての留学プログラムを受講し、来年の1月下旬に帰国する予定です。また、9月8日に中国の山東大学(威海)の短期留学プログラムに参加する12名(男子7名、女子5名)、煙台大学の同プログラムに参加する12名(男子9人、女子3人)が新千歳空港を出発しました。参加学生は同じく5月に行われた留学生選抜試験に合格した学生です。各協定校において、約5ヶ月間にわたり語学プログラムを中心に中国文化や生活風習についての留学プログラムを受講し、来年1月下旬に帰国する予定です。(水野)



8月27日に出発前の韓国交換留学派遣学生



9月8日に出発前の中国交換留学派遣学生

モンゴル文化教育大学と交流協定締結

9月14日、学校法人北海学園(北海学園大学・北海商科大学)とモンゴル文化教育大学は両者の科学技術と教育における交流を促進し、かつ両者の相互理解と友好を深めるため、学術交流・教員および研究員の交流・学生交流と研修・教職員研修と訪問などに関する協定を締結しました。この協定の協定書には森本正夫・学校法人北海学園理事長(本学学長)と木村和範・北海学園大学学長、牧原創一・モンゴル文化教育大学理事長とトムルオチル・サンジビグジ・モンゴル文化教育大学学長が署名しました。(水野)



左から、モンゴル文化教育大・牧原創一理事長、同大・トムルオチル・サンジビグジ学長、北海学園・森本正夫理事長(本学学長)、北海学園大・木村和範学長

キャリア支援センターによる就職支援について

当センターの年間計画として、3年生には年度初めより就職ガイダンスや公務員ガイダンスを定期的に実施しています。また、前期では適性検査受検、企業・業界研究、インターンシップなど、後期にはSPI対策、エントリーシート・履歴書、グループディスカッションなど、就職活動に直接関係する各種講座を開催しています。一方、4年生に対しては、多数の企業や各種団体・公務員の人事担当者を迎えて、北海学園大学との共催による合同企業説明会を春と秋に開催しています。また、就職情報センターにおいて、逐次求人企業情報を開示するとともに、面談などの個別支援を進めています。さらに、本学では多数の求人情報から職種別や勤務地別などを迅速に検索するために、北海学園大学と共同で就職支援システム「ミナトコム」を導入しています。このような支援体制のほか、専門キャリアアップ科目（APQ）として社会行政論、情報管理論、旅行業務論、税務会計論、通商実務論、PAL（専門職中国語・韓国語、TOEIC英語）などを開講し、資格取得を支援しています。また、今年度より2年生前期に「職業キャリアデザイン」の授業を開講し、職業観や仕事の多様性についての学習の場を設けています。



写真上・右上：本学で実施された、4年生対象の北海学園大学との合同企業説明会(10月31日) 写真右下：北海学園大学と合同で実施された3年生対象学内就活イベントLIVE Voice(12月6日北海学園大学)



教職課程が取り組む官学連携

写真左から、北海道学生ボランティア教育実践フォーラムで体験報告を行う本学2年中東唯さん、他大学の学生とともに熱心に研究協議を行う本学の学生



後期ガイダンス 学生向け 研究倫理教育の実施

平成27(2015)年度後期ガイダンスを9月14・15日に実施しました。14日午前に2年次、午後に1年次、15日午前に3年次、午後に4年次、それぞれ各学年に必須の連絡事項と注意事項について、教務センター、学生支援センター、キャリア支援センターがガイダンスを実施しました。特に今回は、教育と研究における倫理教育の一環として、学習や研究活動の中で留意すべき「不正行為」を中心に解説しました。捏造、改ざん、盗用に関わることは不正行為に該当することを認識し、インターネット等からの、いわゆるコピー&ペーストは不正行為となることを改めて指導しました。ゼミナールでの発表やレポートの作成、卒業論文の作成などの際、「不正行為」と見なされる行為には十分に注意することを指導しました。今後は講義・ゼミ等で、具体的に倫理教育で学んだことを実践していくことになります。学生諸君は大学で科学的な研究方法を学び、自身で思考し、自身の言葉で成果等を表現する努力を続けてください。（柳川）



1年次後期ガイダンス



2年次後期の教務センターガイダンス



1年次後期履修登録（9月15日）

履修登録にGPAを導入

2年次所属学科決定

8
9
10
11
12

平成23(2011)年度入試から学部入試に移行したことによる2年次後期に所属学科を決定するための作業は、今年度で4回目となります。学生の所属学科希望を考慮し、各学科の入学定員に対し極端に希望が偏った場合には、1年次の成績評価によるGPAポイントを活用して所属学科の選考を行うことを1年次ガイダンスより周知させ、3月28日の新2年次ガイダンス、5月19日の第1回所属学科選考ガイダンス、次いで6月9日から6月18日にかけての各学科専門ゼミナール見学会を実施し、7月1日の第2回所属学科選考ガイダンスにて「志望学科届」を配布し、7月3日午後4時までを提出期限とし、選考を行いました。

選考対象学生152名のうち、志望学科届の未提出者が4名、提出期限に遅れた者が2名いましたが所属学科の選考を行い、商学科103名、観光産業学科49名の学科を決定しました。選考結果は、2年次後期ガイダンス前の9月11日に学内掲示板にて発表し、各学科の専門科目とゼミナールについて、各学生のキャリア形成を踏まえた履修登録を行いました。（柳川）



2年次後期ガイダンスでのゼミ紹介

本学では各学年の履修登録について、多くの科目で成績評価等による制限を設けず、登録日には「先着順」による登録方法を採用してきました。この方法の特色として学生の履修登録に機会を均等に与えるというメリットがある反面、講義ごとに履修者数を制限しなければならないため希望する科目を履修できないことが多く、登録開始時間よりも早く並ぶことなど、デメリットの面もありました。そこで平成27(2015)年後期の履修登録からは、前期セメスター（半期分）のGPAポイント上位者から履修登録を開始する方法に変更しました。また、手続き変更に伴い各セメスターごとに成績向上を目指し、学習意欲が高まることを期待しています。GPAポイント下位者の履修の際にデメリットが発生することも懸念されましたが、概ね予定通りに履修登録が行われました。今後もGPA制度を活用した登録方法を継続しますが、細部の問題点についても改善を行い、より良いシステムを構築していきます。（柳川）

地 域における観光と医療に関する北海道・台湾コンファレンス in 北見の開催

開発政策研究所

10月10日(土)、11日(日)の2日間にわたり、北海学園北見校地国際会議場において“地域における観光と医療に関する北海道・台湾コンファレンスin北見”が開催されました。このコンファレンスは、今年で3回目になる本学開発政策研究所北見研究会と、昨年は本学を会場にして開かれた北海道地域観光学会の第2回全国大会、および北海学園東アジア観光研究プロジェクト研究会の3大会の合同大会として、約60名の参加者ならびに辻直孝北見市長を来賓にお迎えして催されたものです。開会に当たっては、急用で参加できなかった森本正夫開発政策研究所所長に代り大内東副所長、および今期で交代となる伊藤昭男北海道地域観光学会会長（本学教授）からコンファレンスの趣旨説明と挨拶がなされました。

これら合同の3大会は、共通のテーマとして「地域における観光と医療」を掲げ、コンファレンスでは北海道地域観光学会に所属する観光の専門家だけでなく、地域医療の専門家と台湾の観光研究者をお迎えし講演ならびに発表が行われました。

地域医療分野では、「地域と医療」と題した講演とトーク・セッションにおいて、古屋聖児北見医師会会長、宮本慎一北海道医師会参与、藤井美穂北海道医師会常任理事による講演が行われ、コンファレンスに参加した研修医やフロアの参加者との活発な議論が交わされました。

台湾からの研究者は「台湾における観光研究」と題したセッションにおいて、王珍妮（国立高雄餐旅大学）、高中（静宜大学）、葛西洋三（静宜大学）、蘇文瑜（中国文化大学）の各教授が、北海道に最も多くのインバウンド観光客を送り込んでいる海外地域である台湾の側からの観光研究の発表を行いました。日本国内とは異なる視点からの発表に、参加者は興味深く耳を傾け、議論を行いました。

北海道地域観光学会の全国大会としては、16件の研究発表があり、1セッション4件の発表を2セッションずつ2日間にわたり実施しました。発表者は研究者だけでなく、観光関係者はもちろんのこと、本学大学院生を含む各大学の大学院生、そして本学の学部生も含まれ、さまざまな分野からの発表となりました。昨年度同様、用意したプログラム一杯の発表件



写真左上：大内東開発政策研究所副所長の開会挨拶、右上：来賓の辻直孝北見市長挨拶、下左：宮本慎一北海道医師会参与の講演、下右：辻直孝北見市長と台湾からの研究者の皆さん

数となり、第2回目の大会を催す新しい学会として予想以上の盛会となりました。

北海学園東アジア観光研究プロジェクト研究会の発表部分では、細野昌和研究員（本学教授）からの研究の趣旨説明に続き、地域観光に不可欠な人材育成について張瑞奇静宜大学教授より講演を頂き、村松祐二研究員（本学教授）から現時点までの研究成果について報告がなされました。（細野）

外国語スピーチコンテスト



全日本中国語スピーチコンテスト北海道大会での本学の入賞学生

三人で四つの賞牌を獲得

2015年度全日本中国語スピーチコンテスト北海道大会が11月18日に札幌市で行われました。本学から、2年生の井口まいさんは暗唱部、佐藤結歩さんは弁論部、高橋実空さんは朗読部に出場しました。それぞれの部門で見事に優勝し、三人で四つの賞牌を獲得しました。佐藤さんは最優勝賞に輝き、全国大会（東京）にめでたく出場することになりました。本学の出場者はこのスピーチコンテストで五連勝の夢を実現しました。

佐藤さんと井口さんは、今年の5月、「漢語橋」世界大学生スピーチコンテスト北海道予選大会にも出場し、佐藤さんは三位に入賞しました。井口さんは中国語スピーチコンテストに今回は二回目の出場となりましたが、前回はあまりに緊張しすぎてしまい、実力を発揮できませんでしたが、今回は情を込めて発表し、審査員から一番高い点数で評価されました。高橋さんは今回初めてスピーチコンテストに参加しましたが、審査員の採点資料に彼女の原稿が欠けていたにもかかわらず、発表だけに頼って審査をし、彼女の発音の正確さ、感情の豊かさで、審査員に高く評価され、見事に朗読部の一位を勝ち取りました。三人ともお疲れ様でした！本当におめでとうございます！（蘇）

韓国語弁論大会の結果

去る11月14日(土)、北海道立近代美術館講堂にて第17回北海道韓国語弁論大会(主催：札幌韓国教育院、北海道韓国学園)が開催され、予選を勝ち抜いた13人の出場者が韓国語スピーチの実力を競い合いました。この弁論大会は韓国語・韓国文化・日韓交流と関連のある内容に関して、韓国語を母国語としない出場者が5分以内のスピーチを行うことで競われます。審査の基準は原稿内容(30点)・発音(30点)・表現力(30点)・聴衆の反応(10点)という配点で行われます。当日は札幌韓国教育院の南憲石院長、駐札幌韓国総領事館の韓恵進総領事の祝辞の後、弁論が行われました。本学の斎藤みずきさん(観光産業学科2年)は数多くの来場者の見守りの中で、「韓国と日本の文化の差・子供に対する愛情表現」というテーマでスピーチを行い、見事奨励賞を勝ち取りました。また、弁論大会では、審査の合間に韓国の伝統芸・サムルノリや舞踊が披露されました。（水野）



写真上下とも、北海道韓国語弁論大会で入賞した斎藤みずきさん

中国語入賞原稿（日本語訳）

● 佐藤 結歩 さん「私の夢」 ●

みなさんこんにちは。佐藤結歩と申します。北海商科大学の2年生です。今日は私の夢という題でお話します。

人はそれぞれ大きな夢小さな夢を持っています。私の夢はとても小さなことですが、将来中国と日本両国が友好な関係のままいるための仕事をしたいです。

なぜ私が中国語を学ぼうと思ったのか。私は英語がとても苦手でした。それに加えてもう一つ理由があります。それは日本のテレビで中国のニュースを見ていると、大部分が中国のよくない点に関する事で、5000年もの歴史を持つ中国は本当に日本で報道されているような国なのかいつも疑問に思っていました。それが私が中国語を始めたきっかけです。

私がアルバイトをしている飲食店にはよく中国からの観光客が来ます。その時に気になったことがありました。それは中国からのお客様が帰ったあとテーブルの上には食べたあとのゴミがいつもそのままになっているのです。その時私や他の従業員は中国の方はなぜ基本的なマナーも知らないのかとずっと思っていました。

去年の8月から1セメスター中国にある煙台大学に留学してきました。その時に大学の食堂や校外の飲食店に行った時のことです。そこには食べたあと片付けをする清掃の仕事をしている人がいたのです。その時にアルバイトのことを思い出しました。中国の方の礼儀がなかった訳ではなくそもそも文化や生活習慣のちがいが生んだことだったのだとわかりました。

このことは生活する中で見つけた小さなことではあるけれど、国や文化の差が生んだことで、もし互いに理解せず誤解を生んだままだと、たとえ小さなことでも塵も積もれば友好関係を築く上での障害になります。異文化交流をするときは、互いの習慣や文化をよく理解し、互いに尊重し合うことが最も重要です。

少し不甲斐ない理由で始めた中国語ですが、今では中国語を勉強していることをよかったと思っています。中国語は中国文化の魅力や異文化を理解することの大切さを教えてくれました。そして私の夢はそんな中国と日本がそれぞれ理解し、良い関係を保つことに少しでも貢献できるような仕事をするのが私の夢です。

韓国語入賞原稿（日本語訳）

● 斎藤 みずき さん「韓国と日本の文化の差ー子供に対する愛情表現」 ●

私の母は韓国が好きで、韓国ドラマや映画をよく見ています。私も母の影響を受けて韓国ドラマや映画をよく見るようになりました。今までに映画は20本、ドラマは40本以上見ました。時代劇から現代劇まで幅広いジャンルを見て、共通して感じた日本と韓国の文化の違いがあります。それは母が子供にする愛情表現の仕方と育て方です。

韓国ドラマを見て感じた私の考えを言いますと、他の子供よりも自身の子供を可愛がります。いつも自身の子供を優先視した行動をとる印象を受けます。良い意味で考えると、子供思いと考えられます。しかし逆に言えば、過保護とも考えられます。このような愛情表現をするのがまな行動をするようになると思います。もちろん、こうではない韓国の両親もいるはずと思いますが実際に韓国ドラマを見ると自身の子供が悪いことをしていると分かっている、自身の子供の味方をして正しいことを教えない場面をよく見ます。

日本は自身の子供が1番と心の中で考えているが、自身の子供よりも子供の友達に優しく接します。「人に優しく、自分に厳しく」という言葉を両親が、私が幼い時から教えてくださいました。私はこの言葉が大きく影響をしていると思いました。つまり、私の目に映った韓国ドラマを見ると他の子供よりも自身の子供を優先視する韓国と、対人関係を優先視する子どもへの愛の違いがあるのではないかと感じました。

しかし最近の日本ではこの文化は変化していると思います。幼稚園のお遊戯会で、保護者からのクレームが多く全員が主役をするという状況になったりしています。この保護者を「モンスターペアレンツ」と言い、ドラマ化するなど、社会問題になりました。このように日本は他人の子より自分の子を優先視する文化に変わってきていると思います。韓国も同じように子どもに対する愛情表現の仕方が変わっているのか疑問に思いました。

この他にも日本と韓国の文化の違いはたくさんあります。私が常識だと考えていても韓国では常識ではないこともたくさんあります。韓国ドラマや映画を見たり、実際に韓国へ行ったり、留学生との交流を通してこれから文化の違いをもっと知りたいです。そしてお互いの文化の違いを理解して、韓日関係が良くなることを期待します。

開発政策研究所セミナー



7月3日(金)本学7階開発政策研究所(商学研究科資料室)において、“2015年第1回北海商科大学開発政策研究所セミナー”が開かれました(後援:北海道地域観光学会、観光情報学会東アジア観光情報学研究会)。講師には、北海道情報大学情報メディア学部情報メディア学科准教授でメディア・クリエイティブ・センター長の安田光孝先生をお招きし、『北海道観光とPR戦略—ITを活用した外国人向けPR戦略の現状』と題したトピックが取り上げられました。

近年、アジアからの観光客が日本各地で増加し、北海道もどのように地域の魅力を外国の方々に伝えるかが課題となっています。の中でWebやITを活用して、情報を発信し、さまざまな付加価値をつけたサービスが始まってきています。セミナーでは、そうした取り組みの具体例を交えながら紹介して頂き、活発に議論を交わしました。(細野)

フィールドワーク 竹野ゼミ



写真左:サッポロビール博物館(札幌市東区)、右:北海道博物館(札幌市厚別区)での研修

留学だより

商学部1年 北 阿子 ● 中国煙台大学留学

私は、中国で生活していく自信が全くありませんでした。寮のおばさんに你好も言えなくて、値段が分からなくても通じなかったらどうしようという気持ちの方が大きくて多少金が言えませんでした。授業でも日本語が分かる先生がいるはずもなく、中国語と日本語だけでは最初は理解するのに精一杯でした。しかし、中国に来て2ヶ月が経った今、留学に来たての頃と比べ確実に中国語を理解していると思います。授業内容も中国語と英語で理解できることが増えました。私たちがよく行く食堂が第7食堂で、煙台大学の学生に一番人気があるのも第7食堂なのですが、そこに豆や果物をミキサーにかけて健康に良い飲み物のお店があります。私たちはよくそのお店に行くのですが、何回か行くうちに3元を2元に、4元のを3元にしてくれるようになりました。そのお店の人たちや他によく利用するところのお店の方は、私たちを見かけると笑顔になり手を振ってくれます。私はそれがとても嬉しくて、言葉の壁を越えて笑顔は世界共通だと思いました。留学当初は早く帰国したかったのですが、今では帰国したくない気持ちもあります。大学で中国語を選択して留学に来て良かったです。残りあと2ヶ月、語学の上達と悔いの残らない生活をしたいと思っています。

商学部1年 渡邊 隆雄 ● 中国山東大学威海校留学

山東大学に留学してからまる2ヶ月が経ちました。この2ヶ月の間にたくさん出来事があり、私たちは戸惑いながらも成長しています。一人で解決できないことはメンバー全員で考え、それでもわからない時はこちらの日本語学科の生徒の皆さんが手助けをしてくれました。

留学当初は日曜品を買うためにどこへ行けばいいのかわからず、食事にもすぐには慣れることが出来なかったです。寮のトイレやお風呂の環境にも慣れずこのまま生活できるのか不安でしたが今では、一人一人で購入に行くこともできています。

山東大学では、韓国人留学生が九割を占めていて、私たちが授業を受けているB班の生徒は皆、ある程度中国語で会話ができる上、授業中の言葉も中国語なので毎日授業についていくのがやっ



日本語学科の学生さんたちと煙台の博物館で(1列目左から3人目が北さん)

とでした。日本人学生は数人のグループをそれぞれ三つのクラスに分けられました。最初、先生の言葉は一つもわからなかったのですが、毎日授業中の先生の言葉を聞いていくと段々わかるようになり、今では授業が理解できるようになり、クラスの他の生徒とも仲良くなり、楽しい日々を過ごしています。

教科書は中国語と英語で書かれており、中国語がわからない場合は英語で訳が載っています。そして、先生の言葉がわからない時、先生は英語で聞いてきます。しかし、先生の英語を聞いても答えられませんでした。私たち日本人は中国語だけでなく、英語も必要だと実感しました。

残り2ヶ月の留学生活、学校に行く日数は四十日弱しかありません。この残りの期間を『楽しかった』『いい思い出になった』だけで終わらせるのではなく、12月にあるHSKテストに合格し、確かな実力をつけて日本に帰ってきたいです。



日本語学科の2年生の皆さんと(2列目中央が渡邊君)

本学と北海道 札幌高等学校 高大連携協定調印

11月18日、法人本部にて本学と北海道札幌高等学校との間で、同一法人の両校が相互に連携し交流を深め、双方における教育の質的向上と学生・生徒の資質向上を図ることを目的とした協定の調印式が執り行われました。

協定には、本学・森本正夫学長、北海道札幌高等学校・大西修夫校長が署名・捺印をしました。森本学長から「新しい教育の方向性ができた」とあいさつがあり、大西校長も「人材育成に生かしたい」と応えていました。

具体的な連携事業としては、本学の韓国語や韓国文化担当教授が出張授業を行い、本学に進学した場合、継続的に韓国語を学び交換留学に導くことができます。将来的には中国語も導入することを検討中です。(渡辺)



調印を行った本学・森本正夫学長(左)と北海道札幌高校・大西修夫校長

平成27(2015)年度後期の竹野ゼミ(観光研究ゼミナール)では、外国人留学生のゼミ生が多いこともあり、北海道の歴史や産業についての理解を深めるための野外研修を複数回行いました。研修先は、北海道博物館、北海道大学、雪印メグミルクの酪農と乳の歴史館と札幌工場、そしてサッポロビール博物館です。

北海道博物館では一般展示室を観覧し、北海道の成り立ちを自然史から産業・生活・民族にいたるまでの広いテーマで学習しました。また折良くフランスで所蔵されている「夷酋列像」の特別展を観覧できたので、アイヌ民族についての理解も深められました。なお道内在住の外国人留学生は一般展示室の観覧料が無料になりますので、本学の留学生にも積極的に利用してもらいたいと思います。

北海道大学では大学周辺の施設や大学各施設の内部にもお邪魔して、北海道の発展を支えてきた同大学の歩みを学んできました。とくに総合図書館本館では、所蔵図書や勉強している学生の多さに圧倒され、ゼミ生たちも勉強する意欲をかきたてられたようでした。なお、総合図書館本館も本学学生証の提示で誰でも利用できます。

苗穂にある雪印の博物館・工場とサッポロビール博物館では、乳製品やビールから、北海道経済の一つの柱である食品工業についての知見を深めてきました。せっかくなので見学の最後に、ビール園で北海道の味覚の代表であるジンギスカンを実食してきました。

竹野ゼミでは、今後も北海道への理解を深めるための野外研修を企画していきます。
(竹野)

商学部1年 岡村 彩音 ● 韓国大田大学校留学

高校生の時、K-POPアイドルの存在を知り、ドラマや曲をよく聞くようになりました。最初はただ見ているだけでしたが、韓国のアイドルたちが韓国語でどんなことを話しているのか気になって勉強をし始めたのが原点でした。大学に入ってから留学をするために選抜試験を受けることを決め、努力した結果見事合格し満を持して高校生の時からの夢であった留学生活を送ることになりました。しかし、留学生活が始まると慣れない環境というストレスに加え、勉強面で自分自身に失望することが多々あり、焦りとやるせなさを感じました。韓国に来た当初は、スーパーや公共機関を利用する時も韓国語を聞き取ることも難しい状態でしたし、聞き取れたとしてもうまく受け答えることができず悔しさが募っていくばかりでした。ですが、留学生活を送っていく中で自然と韓国語にも慣れ、韓国人の友達と会話をしたり、留学生の友達とディスカッションをしたり自分でも能力が上がったなど実感できるほどになりました。それは、授業をわかりやすく教えてくれた先生方のおかげでもありますし、共に奮起してきた友達のおかげでもあります。最初は辛いと思うことが多かったですが、留学生活を通して直接来たからこそ得ることが出来た知識と、文化に触れあうことができました。そして、たくさんの友達と知り合えたことを本当に幸せに思います。私にとって、留学をしたことがとても大きな財産となりました。



初雪が降った日にクラスメイト達と一緒に雪だるまをつくりました(左端が岡村さん)

商学科 合同特別講義 開催



7月28日に、株式会社ローソンのエリア開発の第一線で活躍されている唐笠一男(前執行役員)氏をお迎えし、商学科合同特別講義を開催いたしました。「コンビニ業界の現状と課題」をテーマに、飽和しつつあるコンビニ業界で激しい競争を勝ち抜きながら、成長を持続していく独自のセオリー・戦略について、熱く熱く、お話いただきました。「もしあなたがコンビニ業界の社長だったら?」、「どのような戦略で自社を成長に導く?」といった視点や、札幌エリアでの事例を通じた、「店舗開業に関するローソンの戦略」に関する説明には、参加した学生・教職員一同、感銘をうけました。「開店時期にアイドルのコンサートが関係する?」、「すすきの周辺にコンビニエンスストアがなぜ多い?」などなど、興味深いと思いませんか? 講演の最後には、熱いエールを込めて、「自ら考え、自ら行動する“人財”を目指してほしい」という、人生の先輩としてのアドバイスもいただきました。(相浦)



観光産業学科 合同特別講義開催

10月22日に本学8階開発政策研究所にて、観光産業学科合同特別講義が開かれました。講師には、元衆議院議員・自由民主党幹事長で本学大学院客員教授である武部勤先生をお迎えし、「『観光立国日本の戦略』—「地方創生」へ「ビジットジャパン」のめざすところ—」という題目での講義をしていただきました。

講義は、人口減少・少子高齢化に直面するわが国において、地方において需要を生み出し、雇用を創出する「地方創生」は、喫緊の重要課題であるという観点から行われました。観光は、海外からの旺盛なインバウンド需要の取り込みによって交流人口を拡大させ、地域を活性化させる原動力となると説明されました。そして、魅力ある観光地域づくりを進めて、「ビジットジャパン」により点から線、線から面へとネットワーク化して内外から観光客を呼び込み、観光の力で「地方創生」に魂を吹き込むことは、北海道の発展に欠かすことはできないことが示されました。

講義開始時点の硬い空気も、武部先生のユーモアを交えたお話に次第に打ち解け、和気あいあいとした中にも充実した内容の合同特別講義となりました。(細野)



生活世界というのは、私たちが現に生き生活している世界のことです。「生活世界」という概念を最初に哲学に導入したのは、フッサールという哲学者です。フッサールは1935年に、この時ドイツでナチスが政権についていたのですが、「ヨーロッパ諸学問の危機と超越論的現象学」と題された講演で、ヨーロッパの人間性と(実証的)科学の危機について語りました。客観的諸学問はこの危機の時代にわれわれ人間の生にとってどんな意義を有しているのかという問いを自分に禁じてしまっている。それで、フッサールは一切の学問の意味基底として生活世界という概念を提出しました。私たちはそうした生活世界をあらためて主題化しなくてはならない、というのです。このように、「生活世界」という概念が導入されたのは、時代の危機、そして人間理性の解体という危機意識のもとにおいてでした。

これに対して、ドイツの哲学者、フランクフルト第二世代と言われるハーバーマスは、戦後世界という新たな歴史的状況のもとで、いわば民主主義を理解するための基礎として、「コミュニケーション的行為」という概念を導入し、このコミュニケーション的行為の背景的知の領域として、生活世界を考えました。これによって、ハーバーマスは、人間理性のコミュニケーションの理性としての再興を計ると共に、パソソンのシステム論を援用して、社会を生活世界—システムとして捉える社会理論を展開しました。これは自らが生きる時代と社会を理解する試みでもあったのです。

このように「生活世界」という概念は、哲学における一つの重要な概念となっています。生活世界は私たちが現に生き生活している世界ですから、生活世界を理解することは、自らが何であり、何者であるかを理解することでもあり、哲学の一つの特徴は対象に対する認識・理解が同時に、人間たちの自己省察ともなっている点にあります。

研究のいま

「生活世界」 ● 横田 榮一 教授

私自身は、詳しくは立ちいりませんが、生活世界をウィトゲンシュタインの「言語ゲーム」概念に依拠して、言語行為と非言語行為と世界像がおり合わされている生活実践の総体として捉え、ハーバーマスの社会理論を書き換えようとしています。そうすると、ウィトゲンシュタインが行った議論が生活世界を



巡る議論に入りこんでくることにもなります。一つだけ言及すると、ウィトゲンシュタインはこんなふうに言っています。「ひとは、ものごとについて、叙述の仕方になったことがらを叙述する。自分を印象づけている比較の可能性を、われわれは、一つの最高に一般的な状態の知覚と受け取ってしまう」。ここで、比較の可能性というのは、要するに、世界を見る私たちの見方です。それはいわばメガネのようなもので、われわれの鼻の上に居座っていて、われわれの見つめるものは、みなそれを通して見える。われわれは、それを取り外すという考えには思い至らないというわけです。

現在の日本の生活世界は、格差社会や無縁社会と言われるなど、あるいはまた貧困の普遍化やグローバル化の進展など、フッサールやハーバーマスが経験し、直面した生活世界とは大きく異なる世界になってきています。日本での人びとの生活世界を理解するためには、フッサールやハーバーマスの議論を学ぶことは重要なことですが、もっぱら彼らの見方で日本の生活世界を理解しようとすると、ウィトゲンシュタインが語ったメガネを通して日本の生活世界を見てしまうということになってしまう危険があります。

フッサールやハーバーマスの議論を参考にしながらも、日本の生活世界、つまり私たちが現に生きているこの世界を理解することが必要でしょう。

◆ゼミ訪問◆

李炯直 准教授 ● コマース研究ゼミナール



商学部商学科では2年生後期(第4セメスター)から4年生前期(第7セメスター)までの2年間、コマース研究ゼミナールを受講します。多くの講義の中で幅広く学んできた、商学や現代ビジネスに関する専門的知識の理解を深め、習熟度をさらに高めることが目的です。その中から今回は李炯直准教授のゼミナールを訪ねました。

ことがゼミの目標です。また、ゼミのもうひとつの到達目標について「実情や背景の理解だけでなく、それらに関する経済理論も含めて学習し、考えていくことを目指しています」とも李准教授は語ります。

その中で李ゼミの大きな特徴は、活用する資料の大半が英語や韓国語で書かれたものということです。ほかにも経済学を学ぶためにゼミで利用している参考書は前期まで、アメリカで出版されたベーパーバック版の経済学入門書「101 Things Everyone Should Know about Economics」(P・サンダース著)でした。タイトルを意訳すると「経済学で知っておきたい101」となるでしょう。今期からは、韓国の著名な経済学者である、한승환(ハン・スング)延世大学教授が書いた参考書「경제학비타민(経済学ビタミン)」を利用しています。ここから国際人としての素養を身に付けることが、李ゼミのもうひとつの目標であることがうかがえるのです。



本学が目指しているのは、型にはまった旧来の商業教育ではなく、グローバル化の時代にふさわしい内容を持ち、ビジネスの新たな展望や可能性を切り開いて行くための教育です。そのひとつの試みとして商学科ではアジアに軸足を置き、アジアの発展を追求できる国際人養成のためのカリキュラムにも取り組んでいます。李ゼミではそうした本学の目標を視野に、日本や韓国など東アジア経済の現況を学び、併せて理解の基礎となる経済学的知識の学習を目的としています。李准教授は韓国の出身です。専門は経済学ですが、もともとは韓国航空工学部卒業後、カナダのサスカチュワン州立大学、同大学院に留学して経済学を学び、北大大学院で博士号を取得しました。まさにグローバルな学歴といえますが、こうしたキャリアをもとに、専門である経済学の講義以外にも「日本文化と東アジア」など、異文化交流科目の講義も担当しています。今期のゼミ生は2名。ともに3年生で、第4セメスターから継続して履修している、秋田早紀さんと村上沙陽さんです。韓国語や韓国への関心と興味、このゼミを選択した理由などといえます。通常、ゼミは教室を利用して行います。しかし、李ゼミではゼミ生が少ないということもあり、李准教授の研究室を、アットホームであると同時に落ち着いた雰囲気の中で授業が進みます。二人に李ゼミの魅力を知ると、「先生の人が柄」という同じ答えが返って来ました。ゼミでは日本や韓国の経済動向を伝える新聞や雑誌などの参考資料を、李准教授が事前に用意します。それらをもとに「現在の日本と韓国の経済や社会、文化に影響を与える様々な要素や論点を考え、さらにその背景を理解する

軟式野球部が 2部リーグ昇格

本学軟式野球部は、今年度より北海道地区大学軟式野球連盟春季リーグ戦（5月27日～6月12日開催）に参戦し、3部リーグにおいて6戦全勝の1位に輝き、直後、札幌医科大学との2・3部入替戦に6対0で勝利して、秋季2部昇格を果たしました。その秋季リーグ戦（9月24日～10月13日開催）では2部を4位（2勝3敗）の最終成績で終え、次年度春季リーグ2部残留を果たし、目下2部残留のみならず1部リーグ昇格を目指し奮励中です。（原子）



9月28日に野幌運動公園野球場で行われた秋季2部リーグ、対北海道大学水産学部戦。

教養講座を開催

11月20日、本学単独では初めての教養講座が開催されました。講師には、北海道日本ハムファイターズの“もう一人の二刀流”として知られる事業統括本部ディレクター、「DJチャス。」こと中原信広さんをお招きしました。中原さんは1軍のチーム付き広報として、これまで小笠原選手、ダルビッシュ投手などの超一流選手のメディア対応を10年以上にわたって一手に担ってこられました。その一方で、持ち前の企画力と行動力でこれまで選手の育成中心だったファーム施設「鎌ヶ谷スタジアム」におけるボールパーク化の推進役を担い、企業理念「スポーツと生活が近くにある社会“Sports Community”」と活動方針“Fun-Service First”の下で次々と斬新な企画を1軍向けのテストマーケティングとして提案し、アイデア豊富なビジネスマンとしても注目されています。講演は「DJチャス。と夢を追いかけてよう」と題して、スポーツビジネス論・地域共生事業論などの観点から、多くのエピソードを交えてお話していただきました。（佐藤）



Photo Gallery

北海商科祭 2015

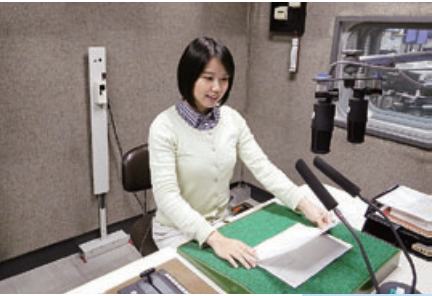


知床のまちとして知られる斜里町出身で、本学の札幌移転1期生として平成22(2010)年に卒業しました。その後、北見市の自動車販売会社で販売促進などを担当しました。北見市には以前本学があったため社内外に先輩が多く、心強さを感じました。自動車の仕事は充実していましたが自分の可能性を試したくなり、平成24年からいまの仕事に就いています。

私の仕事は多岐に渡ります。主な仕事の一つは、ニュースなどの原稿を読んで伝えること。もう一つは、地域の人々や魅力的なものを、一から取材して原稿を書いたりロケに行ったりしてご紹介する、記者やディレクターのような仕事です。ディレクターとして青森県など遠方へ取材に訪れたこともありました。リポーターが番組制作に携わると“本業”のナレーションやスタジオ出演で思いを伝えることもできます。この充実感と達成感はリポーターの特権かもしれません。

実は、放送で皆さんと接しているのは番組作りの最後のわずかな時間で、その何十倍もの時間を取材などに費やしています。その中で気付かされたことは「取材に応じてくださる方々がいてこそ番組は生まれる」ということです。私は在学中に大学祭実行委員会や北海学園大学のYOSAKOIソーランチームに所属していました。仕事では、そこで得た「感謝の気持ちを忘れない」という思いを大切にしています。また、観光産業学科での学びや観光への思いは、放送を通じて地域PRの一助となることで発揮することができます。

大学で得た知識や経験は将来どこにいても必ず生きます。ですから、いま目の前にあることに全力で取り組み、学生時代を大切に過ごしてください。



山内 ゆりか ● NHK北見放送局
キャスター・リポーター

OB・OG NOW!



NHK北見放送局のスタジオにて（写真2枚とも）

東アジアの社会経済発展 と思想ーが開催される

平成27(2015)年度 後期公開講座開催

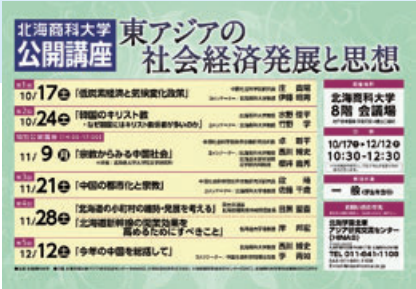
北海商科大学公開講座を上記の全体テーマの下で開催しております。

- 日時：平成27(2015)年10月17日・24日・11月9日・22日（特別講座：14：00～17：00）
・11月21日・28日・12月12日（土曜日10：30～12：30、5回＋特別講座1回）
- 場所：北海商科大学8階会議場
- 参加対象：一般市民（含む学生）

本学の公開講座は平成19年度より前期・後期の年2回シリーズで開催し、本年度で9年目を迎えています。これまで「アジアの時代にアジアを学ぶ」という本学の特色ある教育に照らして東アジアの知的関心を高める内容となるよう留意し、実施しています。恒常的に参加されている熱心な受講者も多く、多数の参加がなされています。今期は中国や韓国、また北海道における様々な考え方の状況を「思想」という人間の精神基盤にまで拡張して考えてみる講座としました。東アジアの諸国および諸地域はそれぞれ固有の精神基盤に立脚していますが、それは常に他国、他地域の影響を時代の変化を通じて受けています。そうした環境変化に柔軟に対応していくためには、独自の精神基盤に拘泥することなく、他の精神基盤との接触や理解を行い、自らの精神基盤を時代に適合した発展的なものへと昇華していく努力が求められましょう。本公開講座が、単に知識の習得にとどまらず、日本を含めた東アジアひいては世界の人々の共通認識・相互理解および交流へとつながることを期待しています。多くの方々の積極的な参加を期待しています。（伊藤）



第3回公開講座の中国社会科学院世界宗教研究所・段琦研究員



座としました。東アジアの諸国および諸地域はそれぞれ固有の精神基盤に立脚していますが、それは常に他国、他地域の影響を時代の変化を通じて受けています。そうした環境変化に柔軟に対応していくためには、独自の精神基盤に拘泥することなく、他の精神基盤との接触や理解を行い、自らの精神基盤を時代に適合した発展的なものへと昇華していく努力が求められましょう。本公開講座が、単に知識の習得にとどまらず、日本を含めた東アジアひいては世界の人々の共通認識・相互理解および交流へとつながることを期待しています。多くの方々の積極的な参加を期待しています。（伊藤）

浅羽祭 挙行 される



10月22日に挙行された浅羽祭参列者の皆さん

学校法人北海学園主催による平成27(2015)年度浅羽祭が10月22日に執り行われました。浅羽祭は本学園創立功労者である浅羽靖先生の名を冠し、この1年間に逝去された北海学園教職員ならびに学生・生徒の御霊を、ご遺族・関係者参列のもと慰霊しているものです。

医務室から～『二十代の健康』⑨ 医務室 二瓶 妙子

「腸」のお話

今から半世紀前の1963年、生物学者、故・千島喜久男博士は、「血液は小腸の絨毛で造られる」「細胞は赤血球が変化したもの」「ガンは摘出するべきではない」などの「千島学説」を提唱しました。しかし、この学説は現代医学の常識とは全く異なることから認められることはありませんでした。1990年代に入り、他の臓器研究に比べ遅れをとってきた腸についての研究が、実はとても大切な器官だとして徐々に証明されていくのです。東京医科歯科大学消化器内科専門の渡辺守氏は、腸はヒトの体の中で最も複雑で、最も大切な組織です。「腸を守る」事は「体を守る事」なのです。そのために「腸の病氣」を早く見つけるための「検査」をして下さい。腸は、「第二の脳」、単なる「管」ではないのです、と述べています。東京大学名誉教授の上野川修一氏も、腸は脳の影響を受けずに自らの「考える力」で消化・吸収作業ができると解説しました。私たちの腸は食べ物を酵素で分解、消化・吸収し、血や肉、エネルギーとなり、不要なものを排泄してくれます。そのメカ

ニズムは単純ではありません。また、100兆個もの腸内細菌が、感染症やアレルギー、自己免疫疾患、肥満などのリスクを回避し、腸の恒常性を維持してくれ、全身の健康を保つのに役立ってくれています。また、生命の観点からいうと脳が腸に影響したり、逆に、腸が脳に影響を与えたり、「第一の脳」ともいえるほど高い能力があります。幼少期の脳の発達についても腸内細菌が関与しているのではないかというデータが出てきていますし、まさに時代が「腸」という器官に注目し始め、「腸の時代」がやってくるのではないかと上野川氏は期待を寄せています。ちなみに、「第六感、勘、直感」のことを英語では「gut feeling(s)」といいます。「gut」は「腸」です。「腹が据わる」「腹が立つ」「腹黒い」といった腹にまつわる表現も日本ではよく使われてきました。



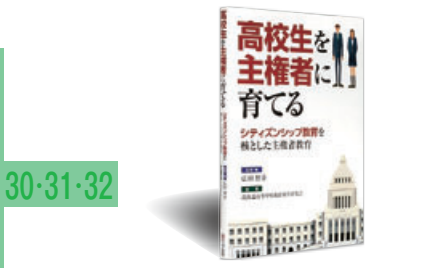
P R O F I L E

●交換教員紹介●

聶 中慶 教授
山東大学文化伝播学院院生指導教授、博士。11月1日、北海商科大学に中国語を教える客員教授として赴任しました。主に中国語Ⅱ、中国語会話・作文Ⅱ、PAL専門職中国語を担当します。1960年2月、吉林省通化市で生まれ、1989年東北師範大学古籍整理研究所で歴史学修士学位、2003年復旦大で文学博士学位を獲得しました。現在、山東大学で主に古代漢語、古典文献学、老子研究、庄子研究、道家文化研究等の科目を担当し、特に老子研究に関しては「郭店楚簡<老子>研究」専門書(中華書局2004年4月)や《王弼本<老子>訛誤之“典型案例”献疑—与尹振环先生商讨》(中国哲学史)、《早期儒道关系考辨—从楚简<老子>与今本<老子>比较谈起》(社会科学辑刊)、《楚简<老子>通假字研究》(语言研究)、《楚简<老子>构成新论》(古籍整理研究学刊)などの学術論文を数多く発表しました。



北海商科大学に赴任期間中、中国語の講義で学生に熱心に教えると同時に、できるだけ日本社会の生活や文化を体験しながら、日本文化への理解を深めたいと思います。



『高校生を主権者に育てる シティズンシップ教育を核とした主権者教育』
北海道高等学校教育経営研究会(堂徳将人ほか) 編著
2015年12月20日／学事出版／ISBN978-4-7619-2178-1 C3037

●大学院生紹介●

今年度は大学院商学研究科に3名が入学しました。許文馨 xu wen xin君は北海学園大学工学部建築学科を今春卒業し、都市計画など工学部で学んだことを生かし、観光分野でまちづくりを研究します。王迪 wang diさん(山東大学威海校卒業)と石玉雪 shi yu xueさん(煙台大学卒業)は交換留学生として今年3月に帰国、卒業後9月期から院生として再来日しました。王さんは企業経営を学ぶことで、日中間の協力的な交流に貢献したいと考えています。石さんは日中間の友好を観光面から研究することで、両国の橋渡しに意欲的です。研究と交流に大きな成果が期待されます。



左から、許君、王さん、石さん



岩波ジュニア新書
『戦後日本の経済と社会—平和共生のアジアへ』
石原享一 著
2015年11月20日／岩波書店／ISBN978-4-00-500818-6 C0236

第3回 高校生 懸賞作文の 募集と表彰式

本学主催 第3回高校生懸賞作文を募集しましたところ、今年度は札幌近郊の高校を中心に応募がありました。この懸賞作文の募集は、高校生の鋭い観察眼で現代の市場、マーケティングに関心を持って頂くことを趣旨として平成24(2012)年度より実施し今回で3回目です。

入賞者一覧〔敬称略〕

順位	氏名	在学高校名	学年
1位	小林 夏子	札幌国際情報高校	3年
2位	大宮 れもん	札幌国際情報高校	3年
2位	磯野 友香	札幌国際情報高校	3年
2位	樫山 空哉	札幌国際情報高校	3年
2位	干潟 孝輔	札幌国際情報高校	3年
3位	中橋 美世子	尚志学園高等学校	3年
3位	中村 海友	札幌国際情報高校	3年
3位	遠藤 梨香	札幌国際情報高校	3年

第3回の募集テーマは、①「日本も含めアジアの人に広く薦めたい私のまちの観光スポット」②「日本も含めアジアの人に広く薦めたい私のまちのグルメ」③「日本も含めアジアの人に広く薦めたい私のまちのお土産」のうちどれか一つを選んで応募していただきました。今回から文章を補助する写真の添付を認めましたが、写真を添付した作文は僅かでした。

表彰式は12月19日に本学で開催し、入賞者には森本学長より、表彰状と副賞(図書券)が手渡され、審査講評と懇親会を開催する予定です。

来年度も実施予定ですので、お知り合いの方に高校生がいらっしゃいましたら是非ご案内ください。（橋元）

行事予定

平成27(2015)年	2/20国	センター試験利用入学試験合格発表(Ⅰ期分)
12/26国		一般入学試験合格発表
平成28(2016)年	3/1国	卒業生発表
1/7国	3/4国	後期修学指導面談②(予定)
1/8国	3/14国	センター試験利用入学試験合格発表(Ⅱ期分)
1/12国	3/18国	卒業証書・学位授与式、卒業生を送る会
1/16国・17日	3/22国	学年末休業終了
1/28国	3/23国	新3年次ガイダンス、新2年次ガイダンス
2/4国	3/24国	新4年次ガイダンス
2/5国	3/24国・25国	新2年次履修登録
2/5国・2/6国	3/25国・28国	新3年次履修登録
2/8国	3/28国	新4年次履修登録
2/13国	3/30国	履修登録訂正日(全学年)